

「山崎昭壽先生に聴く 勤式の重要性 感動できる声明をめざして」

2012(平成24)年8月31日(金)13時～16時開催
於築地本願寺(第一伝道会館内 東京仏教学院
本科室)、38名参加
御講師 山崎昭壽 師(本願寺派名誉侍真)



このたび、組の研修会を開催されるにあたって、浄泉寺さんを通じて声をかけていただきました。私には身に余る光栄で、心から御礼申し上げます。

反面、いただいたレジュメを見て私で答えられるか不安もありました。長年ご本山に勤めて色んな経験をさせていただきましたが、なにより土台が悪いから、ただ年を重ねただけという思いです。大事な組の研修会に、わたしの言葉が一言でもお役にたてばと思っております。

組内からの質問に、ご担当の三名の方にいろいろ検討いただき、私のお答えできる範囲にさせていただきましたが、お役にたつかどうか分かりませんが、進めさせていただきます。限られた時間のなかで、出来るだけ質問の内容にお答えしていこうと思います。

【法要を厳修することの意義】

これはとても難しい問題で、簡単に答えられる問題ではないと思いますが、一番大切なことは私たち僧侶が「み教え」を伝えるということ。

自らがみ教えを信じて、お念仏を喜ぶことが第一だろうと思います。自分が仏様に仕える生活をしている自覚そのものが最も大事です。特に私たち僧侶は否応なしに勤行僧でもあると自覚しなければなりません。僧侶にとって、法要や仏事を抜きにして、私たちの生活はありません。実際「み教え」を伝える上で大きな役割を果たしております。み教えを聞くというのでも、たとえば門信徒の方々は、自ら仏事に出会うことによって初めて仏法に出会い、そしてみ教えを初めて聞いたという人が大半ではないでしょうか。そういう意味において仏事儀礼を抜きにした伝道は無いと私は思うのです。伝道伝道とよく言われますけれど、仏事儀式を抜きにした伝道は考えられず、また法要儀式には必ず勤行がついてまいります。勤行を抜きにして、これまた法要儀式はありません。

仏事を勤める上で仏徳讃嘆、また報恩行の思いでお勤めしているかということ、これまた難しい問題です。月参りなどはつい形だけになりがちです。檀家が多くあるお寺のお盆で一日に何十軒もお参りすると、お勤めという自分自身の心の思いの部分が無くなりがちで、それこそお経の配達、もっと酷いのは過去に言われたことで「お寺さんはいいですね。訳の分からないお経を読んで、わずかの時間でお布施をもらって」と、これ以上の嫌みはないでしょう。そこです。み教えを伝えるという上で、仏事を絶対抜きにしてはなりません。袈裟を着けて上座に座り、後ろ姿を見せて、お釈迦様の述べられた教説を通して、如来様のお心を伝えるのが勤行です。勤行にも、朝夕の勤行をはじめ、年間にいろいろな法要での勤行がございます。その一つ一つ本当に私たちが心からお陰様で尊いみ教えに出会わせて頂いたという報恩行の思いでお勤めしているかと言われると、私自身がお恥ずかしながらそれはできておりません。いまの勤式生を例にとって恐縮ですが、お寺で生活をし、朝晩

本堂でお勤めをする人が非常に少ないのです。お参りをしない本人に問題があると同時に、お参りをさせない親にも問題があるのではないのでしょうか。お勤めが大事だとか、何が大事だとかもっともらしく言いまして、お寺に生活をしながら、朝夕お経の声と鐘の音が聞こえてくるお寺でなければならぬ。そう心得ることが本当ではないのかと思うのです。実践もしないで、朝夕の勤行の音が聞こえないお寺が多いと言われています。皆さんのお寺はいかがでしょうか。若い方々に尋ねても、先般も七月に勤式練習生が修了したときに尋ねてみたのですが、得度を受けてから今日まできちっと本堂のお朝事お夕事、お勤めに出ている人というとゼロに近いですよ。90人近くいるのに。そこに問題があるのではないのでしょうか。今一度、お勤めの大切さというのを私たちは自覚したいものです。

勤式、勤行とは何かとよく言われますが、寺院にお荘厳を整えて、美しく飾られた道場で作法をして形に表して、耳に心地よく聞こえるお勤めにより、それが故人を偲び、仏様のお心、仏心を起こさしめるのが勤行であると思えます。自分自身が感動するお勤めをしていく。

「お勤めをどうすれば有り難くできるか」という問題ではありません。お勤めは形だけではなく、もちろんそれは美しい声で素敵なお勤めも大事ですけれど、なによりも自らが少しでも感動をするように、そしてその感動を伝えるお勤めをしようという心がけが自分自身に求められているのではないのでしょうか。

質問に「勤式の重要性は？」と問われると、私個人的な意見としてはまず「自らがどんな思いでお勤めをしているか」ということを問い尋ねてみる必要があると思えます。伝道といわれ、み教えを伝えるという。もちろん伝道は大事です。しかし、先ほど申した通り、仏事儀礼を抜きにして伝道はありません。そういった所をもう一度心して仏事儀礼の大切さと言うことを考

えてみていただきたい。仏事お勤めの時に心を込めて感動を伝えようという気持ちすら持たないでお勤めをしていることがあるのではないかと。もちろんお勤めから服装に至るまで。勤式指導所に「お経が速い」という投書が届くことがあります。また、お寺さんが着ている白衣の襟が垢で汚れているとか、白衣の下からパッチが見



えているとか苦情も来ます。私たちがお勤めに寄せてもらうということは、見える形、作法、使う言葉、読むお経、ひっくるめて門徒さんは見えています。仏事お勤めで読んでいるお経の意味が分からなくとも心がけてお勤めしているという、それ自体すら忘れて、今日三軒ある、五軒あると座数のみが気になってお経が蔑ろになっていませんか。

質問の中にございませんでしたが、門信徒だけではなくて僧侶の中でも「意味の分からない勤行をしてどんな意義があるか」と、これは良く聞くことであります。この質問の中に「大衆唱和」という言葉があります。読んで分かる、聞いて分かるお勤めをすべきだと聞かされます。しかし、そういう意見を言われるお寺さんの中にも、私の個人的意見ですが、ともすればお勤めを大事にし、丁寧に有り難くやろうとしている面がちょっと足りないのではないかと、そんなことを感じる場合があります。私たちが習慣の中で漢文の教典を読みそして布施を頂く生活をしている。ただ、昔のお坊さんはのんびりしておりました。しかし今のお寺さんは忙しすぎ

て、お茶さえゆっくり飲まないで急いで次の家に行くという。そういう上において、お勤めが済んだ後一言でもよい、み教えの事なり仏壇の事なり仏具のこともご門徒にお話していただけたらと思います。



個人的に持ち込んだ資料に仏事の疑問というのを持ってきました。連続講習の研修会が有ったときの質問の内容です。こういう質問がお寺さんから教えてもらえないので尋ねたいという内容です。その内の一つでも良い。簡単にお話していただくと有り難いのです。それさえもなくお茶も飲まずさっさとお帰りをなさるから、お経が速いなどという受け取りになっているのではないのでしょうか。もともとそれもお経が分かるとか分からないとかいうのは、本来は勤める心得は別として、分からせるとか分からないとかいうこと自体が問題にするべき事ではないと私は思うのです。経文やお経を分からせるためには布教使がいるのです。お勤めをすること勤式の使命というのはどこまでもお勤めをしているというお経を称えているという、儀式や作法を行いながら漢文のお経であろうがお経を称えている、勤めているというそこに、そのこと自体が尊い使命があるんじゃないかと私は思っています。今読んでお勤めがどんなことを言うてるのかという、いちいち御文が分かるという事は到底不可能です。読みながら分かるお経というのはありませんですから。そのへんに声でお経を読み、身体で作法をしているというそ

こに勤行そのものの本来の意味があるんじゃないだろうかと私はそう思っています。布教はみ教えが分かる、たとえば、どこそこのお経、今読みましたお経はこういう意味がありますという説明は布教使の使命でしょう。しかし勤式というのはどこまでも形を整えて経文を読み、称えることによってそれをひくくめて、法要儀式という一つの形を作ったものを通してみ教えを伝えるご縁にしているのではないかと思うのです。勤式が式務の中で特にその宗教的な意味合い。この間の大遠忌でもそうです。お浄土を再現したというあの御影堂の美しさ。その舞台の上でお坊さんがそれぞれ装束を着け、揃って作法し、揃ってみんなでお正信偈を読む。あの舞台そのものが伝道であり、み教えを聴聞する助縁になる。そこで今読んでお経にはなんとという意味があるのですかという、そういった議論をするものではないと、私は思います。節が良いとか悪いとか、必要とか不必要とか議論すること自体が問題外です。

どんなに経文を分かり易く言っても所詮難しいもの。もちろん、お勤めする側にはこれだけは心得なければならないこと、大事にしなければならないこと、目で経文を読む、節だけ称えるのじゃなくして、読んでお坊さん、称えているお坊さん自身が、たとえばこういう意味合いがあるなということが理解できる勉強はしておく必要があります。そうすることが気持ちの上から声になって出るというものではないかと私は解釈するのであります。たとえば御文章に「末代無智の」と、末代といったら限りない、無智といったら、単なる人間の世界の無知じゃない。そういったことを大まかに知っておいて読むと人に必ず通じます。そういう意味において、経文は自分自身がある程度意味を心得ておく必要があります。聞いている人が今どのお文を読んでどんな字を称えているか、そんなことをいちいち聞いても難解です。み教えを耳で味

わう、心で味わう、そこに意味があるのではないかと思います。真宗の仏事勤行にどのような意味がありますかという質問がありますが、一般的にお勤めというのは朝夕の礼拝のことですし、仏祖に対する感謝の報恩の行であるという。他宗ではお経を読むことは故人に対する追善供養のお経だとされ、真宗でも報恩行というより、今日は命日だからお寺さんにお勤めに来ているという受け取り方をする方が多いです。だから、お経を聞いてそれを縁に自分自身の信仰を深めてもらおうというのが真宗の教えですが、それがなかなか難しい問題でもあります。ご承知のように浄土真宗のお勤めの始まりは、



やはり善導大師さまの五正行でしょう。往生極楽の為の助縁として、助業として五正行、五つの行をお立てになりました。その第一に読誦正行という言葉がある。なんの為にお経を読むのかというと、それは善導大師様がお書きになった五正行というものの第一番にまずお勤めをすることが大事であると。そして観察と称名と礼拝とそれのすべてが仏徳讃嘆になると、そこからお経を読むという形が生まれたのです。でもお経を読むと言うことは教典を読み、教典に書かれていることを自らが信じこれを行う。それが何よりも大切なのです。

経を読む心、勤式作法というのは形も大事ですが、何よりもお経を読むお寺さん自身が問題だろうと思うのです。一般の質問にもよくありますが仏事勤行とは何かと。古くから浄土真宗

の法式の上で三部経を読み、正信偈三帖和讃を称えることを仏事勤行といいます。これに対し、天台声明を受けて経文に節をつけて読むのを声明といいます。皆さまからのご質問に声明と梵唄の違いについて聞かれています。ふたつはもともと区別されていたものですが、現在は声明と梵唄は仏事勤行と区別がつきにくくなっています。仏教本来の上から言うと経文を読誦したり偈文を称えたりする習慣がありますが、経文に節をつけずに棒読みするのを読誦と定義されています。転読ともいいますが、三部経などに節をつけずに読むことは読誦です。一方、偈文などに節をつけて読むことを諷誦といいます。また、声明はもともとインドにおいての読誦のひとつの方法でした。その言葉が今日伝わってきているのですが、お経を称えることを総称して声明というわけではありません。インドにあった五つの学問の分野の内一つが声明と言われていた学問で、梵字を書写したり、その梵音を称えたり、音韻に関する勉強をしたり、そういった意味合いの学問だったのですが、インドから中国に伝わり、中国において梵字のお経を漢字に翻訳されました。もともとお釈迦さまがご在世の時にあった宗教的音楽的なものをひくくめて、中国に伝わって法要儀式にそれを称えるという習慣が生まれ、今でいう魚山声明ともよばれ天台声明とも呼ばれている、善導大師様をはじめ一番有名なのは五会念仏作法や法事讃作法をおつくりになった法照禅師、あの方々が声明や梵唄という形になって作曲したと言われています。それが日本に伝わり、ますます日本でも作曲されたものが、声明と梵唄とどう違うのかは後で説明させていただきますが、いずれにせよそういった形で中国から日本へ伝わってきた。

これに関連して色々質問にお答えいたしますが、私たちの宗派の勤式の流れというのは、例えば宗祖親鸞聖人は仏事のお勤めをするということが無かったことを考える必要があります。まずもって寺院、お寺がございませんでした。



もっぱら部屋を借りて同行衆と法義についての示談中心の集まりでありました。ご本尊について、宗祖親鸞聖人は木仏、絵像を礼拝の対象になさらなかった。六字名号、八字名号、九字名号、十字名号とございますが、親鸞聖人は生涯をかけて十字名号だけが礼拝の対象であった人生でありました。だからお経を読むということはどこにも書いてありません。お経を読むようになったのは第三代覚如宗主の時。親鸞聖人の三十三回忌にお作りになった『報恩講私記』が有名ですが、その前に親鸞聖人の廟堂が寺院化しました。久遠実成阿弥陀本願寺という寺号を賜ったことによって廟堂を寺院化し、法要儀式が生まれ、その最初として三十三回忌に『報恩講私記』をお書きになりました。その『報恩講私記』の冒頭や間に、すでに天台の伽陀が用いられています。なお、覚如宗主の父である覚恵法師も京都大原で梵唄を習得された方とされています。この頃からすでに梵唄が用いられていた事が知られていますが、しかし仏事には主に礼讃や法事讃が用いられていたところ、第八代蓮如宗主の時代に教団の民衆化と共に、勤行も朝暮の勤行の礼讃を廃して「正信偈和讃」とし、年回には法事讃等を廃し「三部経」を読む

とされました。その後、第十一代顕如宗主の時に本願寺が門跡寺院になった事から宗祖三百回忌に初めて七条袈裟を着け、礼盤を用い、登壇行道をして声明を唱える法要形式となり、その後第十三代良如宗主の時に、御影堂落慶法要に結衆すべてが七条袈裟を着け天台声明を唱え、鑊鉞じょうはちを打ち、雅楽を用いて法要が勤められました。特に第十四代寂如宗主の時代には、天台声明を採り入れて法要を勤めるために、天台声明家の幸雄さいゆうを招いて声明集を制作し、指導するなどといったことがあり、第十七代法如宗主の時代には聖道的な経文の声明を廃し、真宗正依の経文に天台の博士をつけて用いるようになりました。また第二十一代明如宗主は仏事儀礼を古事に習い復活するなどし、声明集を再刊されました。特に第二十三代勝如宗主は伝灯奉告法要に際し、それまで用いられていた声明集、礼讃、正信偈などすべての面で大改革をされました。例えば声明集は十七作法から成るものとなり、誰かについて習わねばならない難しい声明が平易にされ、またそれまで用いられていた五種類の正信偈を廃して真譜、行譜、草譜を制定され、和讃は三種とも同一の唱法と改められました。和讃の節譜については往生礼讃の節を参考にされています。その他に往生礼讃も晨朝偈から始まっていたものを日没偈からとし、般舟讃を分けました。また現在の草譜の正信偈偈文の「中夏日域之高僧」など三カ所を引くことや、葬儀に用いる念仏、和讃、回向の唱法もそれまでの中拍子ちゅうぱしの唱法を用いています。時代と共に勤式も大きく変わってきたということです。

勤式勤行はなぜ重要なのかということは先般も勤式練習生に伝えましたが、あなたの生活からお勤めや仏事儀礼を抜いたら後はあなたに何が残るのか？朝から晩まで365日伝道させていただく場があるわけではありません。月参りなどさせていただくそのこと自体が大きな托鉢行でもあれば、伝道の間ではないですか。だから

伝道ってなんですかと言われると、それはもちろんみ教えを伝える事。では勤式とは何かというと、命日を縁として自分自身が法を伝える場であるし自分が聞く場であると同時に、伝える事の勉強をさせてもらう場でもあるのです。お仏壇のご本尊の裏書には「方便法身尊形」とい



う裏書が必ずしてあります。94名の勤式練習生全員が「そんなこと初めて聞きました」という答えでした。そこにも問題があります。勤式というのはお経を読むという事だけでなく、教義的なことや歴史、伝道ひっくりめた事ではないかと思うのです。だからお勤めを抜きにしたら、仏事儀礼が無くなったら、それこそみ教えそのものを伝える場が無いのです。その上において私は布教は出来ませんが、ささやかでもお参りすることによって一緒に手を合わせ一言でもみ教えを聞いてもらえる場を与えてもらっている。その意味において亡くなった故人を通してお互いに仏恩を喜ぶ場でもある。だからお勤めはやはり大事であり、これからも大事にしてもらわないと困るなど思っております。だからなぜ重要かといったら人に尋ねる事じゃなくて、あなた自身にとって日常生活の中にお勤めが大事でありみ教えを伝える場でもある。それを抜きにしたらじゃあ私の中に何が残るかということ、ご自身が一つご自身に問いかけていただいたら解るのです。それが私の思いです。答えにならないかもしれませんが、勤式が無かったら私は生きていけません。あらためてお勤めを大事

にしたいと思うのです。

ところで、埼玉県では月参りに何をお読みですか？「私は正信偈です」（聴衆発言）。関西では阿弥陀経です。阿弥陀経は1882字あります。難しい漢文の言葉で10～15分で読んだら早く聞こえる。同じお経を読むなら讚仏偈は320字しかありません。それを10～15分で読んだら本山のお晨朝より速度が遅くなります。たとえば讚仏偈を読んだ後、あとは仏事に関する事、たとえば、何のためにお燈明を上げるのかということ一つでも説明してあげてください。5分間くらいお茶をいただきながらお話ししてあげたら、受け取り方は違ったものになります。一軒ごとに違う話をする必要はなく、お燈明の話が続けたらいいのです。早くお参りすることばかり考えて、五軒も六軒もお参りしなければならないとつい「如是我聞」を聞いている方にしたら、それこそ蠟燭の減り具合を見ているということもありますね。もうすこしお勤めの事も考えてほしいです。私も最初は阿弥陀経を読んでおりました。最近では礼讃文「我今さいわいに」と正信念仏偈と念仏と恩徳讃の本を作って、それを10冊くらい持って月命日に行き家族みんなに渡して、さあお正信偈を読ませていただきますように月参りをさせていただいているのですが、結構皆さん方喜んでくださるのです。だから解らないお経を読んで何の意味があるのだと、それを言い出すと勤式の上で難しい問題となりますね。解るとか解らないではなくてご命日を縁としてお勤めをさせていただくことが、お勤めをしているお寺さんそのものがみ教えを聞く場でもあるし伝える場でもあるのです。その辺の事を考えていくことが必要ではないでしょうか。たとえば「しんじんのうた」や「らいはいのうた」などの意識聖典ができました。「天人ともにあおぎみる」の天人とは何ですか。それ以上わかりやすいお経は作れません。勤行聖典という永田文昌堂から出ている得度のときに使う三部

経の裏側に教行信証のお勤めが書いてある。じゃあ「ああ弘誓の業縁多生にも」、私自身でさえ難しくてわかりません。お勤めとは解るとか解らないとか、それをお寺さんまでもが言葉にしたらどうかと思います。今、自分が日々の生活の中にお勤めをさせていただいて布施をいただいて、皆さん自身がお考えいただいてもらうと有難いと思います。だから重要性ということについてどう答えてあげたらいいのか私も分かりませんが、そんな思いであげさせていただいております。

さてお手元に質問表がありますが、これに順番に答えさせていただきます。

質問①鼻音^{びおん}がなぜ必要なのか？鼻音の使い分けはなぜあるのか？鼻音の必要性と意義について

鼻音がなぜ必要なのかというご質問です。これは勤式を出した人は鼻音という固有名詞をご存知ですけれど、何のことかという方もいらっしゃるでしょう。もともとはインドから中国に教典が伝わって漢字に訳されたが、その漢字を読むうえで発音する約束事というのですかね、鼻の発音を使うのです。一番よくわかりやすいのは、大本の三帖和讃を帰ってからご覧ください。念仏とか成仏とか必ずと言っていいくらい「ち」の音で書いてあります。「つ」とは書いてありません。即如ご門主発行の三帖和讃でもこれを踏襲してあります。「たちつて」の「つ」の音が無いのです。教典が日本に伝わった時点で「つ」という音は無いのです。みんな「ち」だったのです。だから「つ」の音を発音するときに「つ（鼻音）」という息を鼻から抜いて発音することで鼻的破裂音、鼻音と言われているのです。50音のたちつてとは日本の発音なのです。だからなぜ鼻音が必要なのかといわれると、中国で教典が翻訳された時点でその漢字を読んでいく上に使う伝承音、伝えられた読み方が鼻音なのです。漢字を読むための音なのです。なぜ必要な

のかと言われたら、もともとはこういった音であったということになります。

それに関連するのが四声^{しせい}です。二字仮名、三字仮名を表現するときに使います。たとえば「はし」を発音するときに音の上げ下げについて漢字一字ごとに決めごとがあります。それを四声といいます。音が真っ直ぐ・上がる・下がる、促音など一字ごとに発音するうえで大事な事なのです。宗祖親鸞聖人も高田の専修寺に保存されている高田本の正像末和讃の最初にこれを書いて、一字一字全部仕分けをされている。『唯信



鈔』という書物にも親鸞さまは一字一字記号を入れたり、お経を読むことの大切さを示されているのです。だからそれから考えても鼻音は大切な事なのです。それから鼻濁音ということもあります。たとえば「阿弥陀如来の本願」や「わたくしが」「阿弥陀如来の六字の名号」などは鼻濁音で、お経を読むうえで大切なことになっている。NHK アナウンサーでもこれが出来ないとならない。HONGANJI ではなく HONGWANJI。御伝鈔でも「ほんがんじ」ではなく「ほんぐわんじ」。廻向の願以此功德でも「ぐわん」であった。涅槃でも「ねふあん」と書いてあります。こういったことが段々伝わらなくなっている解らなくなってきた。なぜかと言われたら宗教的な教義に係る事ではないからです。お経を読むうえでの約束事として定まっているということなのです。これに関連するのが連声連濁ということ。上の字の関係上、下の字が変わっ

てくる、たとえば千は「せん」ですが、三千だと「ぜん」と発音することや、正覚は「しょうかく」ではなく「しょうかく」と発音する。こういったことも約束事として大事にされているのです。皆さんのお寺に大きい三部経があるでしょう。圈点はみでんという一字ごとに江戸時代の学僧、玄智げんちが第十七代法如宗主の命を受けて三部経の26,609字の全てを学問的に校正したのが校点三部経です。右上に○二つ付いているのがありますが、縦に二つ、横に二つ、○一つの区別があり、三帖和讃にも往生礼讃にも全部これが付いていますから意識してみてください。横二つは



全濁といってもともと濁って読む音。縦二つは連濁といってももとは清音であるけれども特にここは濁音に変えて読みなさいと指示してあるので新濁ともいいます。○一つは転音しますよという意味です。もともと三部経は100%、わたくしたちの宗派は何百年経っていますけれど、一回もフリガナのついた三部経を出版したことがございません。僧侶は26,609字をフリガナなしで読めて当たり前なのです。読めないどころか読んだこともないお坊さんまでいる。もっともらしいことを言いながら、三部経を一回も読んだことが無いというお坊さんまで居るからややこしい。今出ているのは中央仏教学院の仮名付きの本が出ている、それを利用している。宗派としては正式に仮名付きの三部経は出されていません。余談ですが私の若い頃、式務に勤めていた頃は、当時の御堂衆は層々たる方々で

あり、毎日の晨朝引き続き、大本の三部経の繰り読みがありました。それがまた早いので、特に下巻の五悪段は字数の違いが多くて読みづらく、もっと練習しろとよく叱られました。そのおかげで今も読め、お夕事は今でも繰り読みをしています。使う、使わないは別として、是非生涯に一度は全三部経を読んでください。私の生まれた北陸では、昔は先祖の五十回忌を勤めるのにお寺から礼盤を借りてきて、住職は七条袈裟を着けて、全三部経を二時間半かけて勤められた家がありました。今はもっぱら得度教師に用いる三部経の本でお勤めされていますが、是非生涯に一度、仮名付きの三部経の本でいいから読んでいただきたいものです。

話が脱線して悪いですが、こういったことも鼻音と共に大事ですよということなのです。宗祖親鸞聖人もこういったことを非常に大事にされ、今日このように伝えられているということなのです。参考資料として真宗全書があったら、その中に『唱読指南』という正信偈の読み方を指示したもの、それから『五帖消息』という御文章八十通全部の読み方、例えば「念仏は」にたいして「ねんぶつた」と読むなどの指示がしてあるもの、『御伝読法』、御伝鈔の読み方を書いたもの。そういったものは三部経を校点した玄智げんちさんが書いて出版されています。真宗全書68巻目にありますからご関心のある方はどうか見てください。

質問②勤行と声明の違いは？

勤行と声明の違いはというご質問が書いてあります。勤行とは正式には勤行精進という、その言葉を略して勤行という。怠りなく勤め行い、勤め励むという意味である。それが仏前に侍り、読経することが勤行と言うようになった。辞典的にはそういうことになっています。仏教には昔から経文を読誦したり、偈文に節を付けたりする習慣がありますが、節を付けずに棒読み

することを読誦と規定しています。浄土真宗の上では三部経を読み、正信偈を読むことも仏事勤行と定義づけている。一般で言ったら三部経と正信偈を読むことをお勤めという。それから節を付けて読むのを声明または梵唄。それぞれ区分けしている。昭和に入って梵唄という言葉がなくしました。梵唄の梵とはインドということで、唄は歌ですのでインドの歌という意味になります。それがいつしか日本で作られたお勤めまでひっくるめて梵唄と。明治以前は声明集という本がございませんでした。全部梵唄です。明治以降、全て声明といい声明集が出されているのです。

質問③遺骨は基本的に正面を避けるように習ったと記憶しているが、2009年本願寺出版より出版された葬儀規範では正面に安置する形も掲載されている。「遺骨に対して手を合わせるのではなく、あくまでも我々が手を合わせる対象は阿弥陀如来のみ」と門徒に説明してきたが、今後正面に安置したい門徒さんにどう説明すればいいのか？

遺骨は基本的に正面を避けるようにとあるが、葬儀規範の89ページと90ページに正面に遺骨が置かれたた絵が描いてあります。質問者が誰かは聞きませんが、規範の改訂に当たって私も委員のひとりでありましたが、出来上がったものを点検するのですが、教学研究所が全て用意をして、御門主様のお手前に上がって、ご認許されたものなのです。念のために指導所に来たときに、どう返事をしたらいいのかいたら、「要らんこと言わないで下さい」と(笑)。そこで西大谷さん、分骨のお勤めをどうしているのかと。わたしの息子が式務に勤めておりますので正面に置いてお勤めしているのかと聞きましたところ、「いえ、真ん中を外してお勤めしております」と。間違いはないとの再度問いまして、間違いはないとのことなのです。だからこの答え

はご勘弁ください。お骨を正面に置くと、目がご本尊にいかずにお骨に行ってしまう。舍利崇拝になってしまいます。だからやかましく言われた。どうあれ如来様、お名号を礼拝の対象とすべき時に、お骨だけがそうになってしまうとお骨の追善供養のお経になる、そういう受け取り方になる恐れがあるとよく言われたものです。お寺の場合、たとえ住職であってもお骨を前卓の上に置かないでください。前卓は阿弥陀様を供養する三具足や五具足を載せる台である。だから絶対お骨を載せないでください。なにか他の適当な台を用意してください。じゃあ礼盤の向卓に



置いたらいいじゃないかということこれは意味が違う。だから一方で建前をいってやっていることが違う事にならないようにお寺の人がやっぱり注意をして欲しい。前卓がだめだから礼盤の向卓に置いたら、ご門徒さんが見たらやっぱり正面に置いているように見える。真正面に置いているじゃないかということになる。自分がご門徒さんの中陰法要にお参りしたときに、お骨が正面にどんと置いてある。これじゃまずいと、注意しないお寺さんのほうが多いといいます。大体お仏壇があって床の間に中陰壇があって、どんなことがあっても、お勤めはお仏壇の前で行うべき。中陰壇にしたら困る。だって、お名号があるじゃないかという。そうじゃなくしてお仏壇の前でお勤めをしてください。そうしたらお仏壇の前に中陰壇を飾ったらどうすべきか。そうなる何とも返事のしようがなくなります

が、質問なされたから自己判断してください。私にもちょっと答えようがございません。ご門主様がご認許した葬儀規範ですからそれ以上のことはよう言いません。



質問④博士はなぜできたのか？

博士はなぜ出来たのか。これはお釈迦様というのはお説法しなされる時に、ただ単にしゃべるだけじゃなくて、いろんな形で教えを説きなされたらしい。字数がずーっと続く長文のところは、お説教をずっとなさっている。しかし、讃仏偈とか重誓偈とか4字なり5字なり間の空いているところは歌です。だから偈というのです。そこをお釈迦様は特に「正覚大音響流十方」。お釈迦様というのは凄く美声だって。聞いただけでも、もう、ぐっと来る位と仏典に書いてある。で、お釈迦様はお話しされる時に、今しゃべるようにしゃべるだけではなくして、自らが歌って妙な旋律を付けて伝えることを普段からなさっていたと言われる。特に人間は当たり前になしゃべっていることをよりメロディー付けて経文を話すことで、よりよく伝わる。だから名優なども心に伝わるというのはそこだと言うことです。だからそういう意味で声明というのはメロディーを付けることは意味があるのではないかと。み教え伝達する上で、より伝えやすい。そこに博士が考えられた意味があると言われる。いかにして仏さまのみ教えを伝えたいかという一つの方法論として、それが博士だ

ろうと言われているのです。何でと言われたらそうとしか言いようがないです。

質問⑤大衆唱和することが望ましいとは思いますが、僧侶のみで読誦するとき、参詣者への御文（経文）の説明等は必要ないのでしょうか。

それから、大衆唱和ということについて、理想としては皆でお勤めをする事は大事です。だけど、先ほども言いましたように解るお経を伝えるという大衆唱和というのは難しいのではないのでしょうか。どんなに言葉を訳しても、お経の専門用語を抜きにしてはお経が成り立ちません。先ほども言いましたが、「天人ともにあおぎみる」という天人とは何かという説明する私自身でさえ難しい問題がついて回る。大衆唱和といい、戦後、開かれた宗門という運動もありました。だから意識聖典ができたのですが、今現実には本願寺で年間100座以上の法要を勤めておりますが、意識聖典でお勤めをされているというのはせいぜい4月15日の立教開宗記念法要の共通勤行ぐらいです。本山は何処までも建前をいい現実とは違うんじゃないかという方がおられるかも知れませんが、今回の大遠忌には宗祖讃仰作法と申して、ご和讃を中心にして用いられましたが、すべての法要に意識を用いるということは難しく、そこに大衆唱和の問題があると思うのです。皆さんが年回法要に行ったときに、「しんじんのうた」や「らいはいのうた」を一緒に称えて、それでご門徒さんが納得してくれると思いますか。一度考えてみてください。意味の解らんお経だけれども「天人ともにあおぎみる」ではどうでしょうか。日々の生活の中に朝夕の礼拝の時に用いてください。解らない言葉もあるけれど、その時はお答えをさせていただくというのであれば解りますが、僧侶共々に大衆唱和をしましょうというのはなかなか難しい問題が付いているのではないのでしょうか。これは私の答えにはなりませんけれど、おたず

ねする方にもしご自身が衣を付けて檀家さんの所に行ってお経を読むときに、檀家さんにどういう風に受け取って貰えるのかと一度考えていただきたいと思うのです。共通勤行だと制定したけれど、現実には日常生活の中に用いられていないというところに、なにがしかがあるのではないかと思うのであります。本山に於いて大衆唱和は同朋運動の中で議論されてまいりましたが、受け取る側のご門徒さんがどう受け取るべきか、そこに難しい問題があります。「しんじんのうた」を月参りに読む時と、「帰命無量寿如来」を読む時とちょっと違います。あるおばあちゃんは日頃正信偈六首引きを読み、夕事には阿弥



陀経を読んでいらっしゃいます。ある時、お盆にお寺さんにお参りを頼まれた。お忙しいでしょうから、何時でもお越しになれるときにお願いしますと。お盆参り当日、忙しいお寺さんはお仏壇の前に座って、先におリンを叩いて、これはオオオと慌てて、お勤めしながらマッチを擦って蝋燭に火を付けて。ふだんの月参りに3000円しかお布施をしないけれど、お盆だからとおばあちゃんは5000円包んだそうです。せっかく来てくださったのだから、お茶の一杯も差し上げたいと台所に行った。ヤカンがピーと鳴るのがいつもは5分なんですって。さて、お茶をお持ちしたら、「お茶は結構。私は急いでいるので失礼します」と行ってしまわれた。あ然として、じゃあ私が朝晩お勤めしているお経と、お寺さんが読むお経とどこがどうちがうのです

か。教えて欲しいという問い合わせが本願寺にありました。この問いに対し僧侶としてどうお答えすべきか、深く考えさせられます。

ところで、昔からご三部経をご門徒は読まないと言われていて、お仏壇の中に三部経を置くと言うことがありませんでした。しかし最近は何度の時に用いる新制三部経が多く門信徒に求められ、時には年回法要の時などに親戚の人にまで配って一緒に読む家があると言います。そのため、お経様を頂くのではなくて、ともすればお寺さんの間違い探しをされるわけです。法要後のお齋の席上、「今日のお勤めは有難かった。あんたのこののはいいですね。それに比べて我が家のご院家さんは早くて、何を讀んでおられるか解らない」と。そんな風に言われたら誰だって考えさせられます。

私がお経を読むのではなくて、身につけているお袈裟が尊いと、私は思います。お袈裟を掛けることで尊くなり、お勤めをさせてもらって如来様のお心を伝えさせていただくのです。だから、あなたが読むお経とお寺さんが読むお経は何処が違うか、それは「お袈裟を掛けているから尊い」と、答えにならないような口実をしたことが以前あります。ですから、大衆唱和を何処までどう考えたらいいのかと言うことは大変難しいことだと思います。

質問⑥願以廻向の譜の四行目のユリが2種類聞くことが多く、どちらが声明的に合っているのでしょうか。

願以此功德の4行目の節で、ユリが一カ所ありますが、この節は葬場勤行の帰三宝偈の回向に用いられている節です。葬場勤行集をご参照ください。

[休憩]

質問⑦声明によってもたらされる効果とは？

声明によってもたらされる効果とはどういう質問ですが、お経様は直音でお勤めをするよりも、メロディをつけたほうが、ありがたく聞こえます。これは民謡や演歌と同じように、メロディをつけること、長短をつけることによってより伝達するひとつの方法です。その際に気をつけたいのは声の良し悪しではなく、心を込めてお勤めしているかどうかという「意識の有無」です。頌讃を称えているときなど、自分で聴いてもありがたく聞こえるよう称える心がけで表現してください。もちろん声の良し悪し、節の上手下手も大切ですが、一番大切なのは自分が抱いている感情を表に出すことだろうと思います。まだもう一軒お参りしなくちゃならないなと考えていたりするようでは駄目なので、今私がお勤めをしているんだ、今自分の声を通して仏さまの心を伝達しているんだという意識をもってお勤めをするということが大切なのです。お勤め中に余分なことを考えていると、ちょっとありがたくありません。声が美しいかどうか



というよりも、心が籠っているかどうかを意識してお勤めをしてください。自然に表れるものです。また、声を出して伝えるのだから発音をきれいにしてください。私のように総入れ歯になると発音がまともにできません。言葉をきれいに、発音をきれいにしてお勤めしたら、必ず「今日はお寺さんのお勤め、ありがたかったわ」と思っただけです。私は何度もそんな経験をしてきました。同じお経様を読むにもお布施

の払い甲斐があると思っていただけるかどうかは、そこだろうと思います。ここらへんではいかがでしょう。私の自坊では報恩講にあたり組内住職に初夜礼讃の登礼盤をお願いしておりますが、中には上手に「作曲」なさる方がいらっしゃいます。参拝者には全員赤本をお持ちいただいておりますので、それを50年続けておりますと参拝者のおばあちゃんの方が上手なぐらいです。今日の御導師さんはお経が下手ですねと言われてたりするので、困ることもありますが、いずれにしてもメロディをつけることによってありがたく聞こえる、それが声明によってもたらされる効果というものなのでしょう。それは声明によって何を伝えるのかということも含めた大きなテーマでしょう。どこまでも、仏さまのお心を伝える一種の手段です。お釈迦様のお言葉に旋律がつくことによって仏教は伝播しました。もし旋律がついていなかったならば、これほど広がらなかったのではないのでしょうか。私のお寺さんのお勤めはとてもありがたいなと思ってもらえるようお互いが努力をしていく、それが勤式なのだろうと思うのです。

質問⑧塗香を2回塗る意味は？

「塗香とは、手や身体に香を塗ること」（仏教大辞）とあります。お釈迦様の時代からインドでは体臭を消すために香を身体に塗り、また客人を迎え入れる部屋に香を焚くなどの習慣があり、仏教伝来とともに中国を通じて我が国にその習慣が伝わり、諸宗のみならずわが宗派でも仏事儀礼の上で供香、焼香と共に塗香を用いております。

経典のなかにも仏への六大供養（灯明、華鬘[花]、焼香、飯食、塗香、闍伽[水]）の一つとして示されています。この六種を供え用いて天台宗の大師影供作法が勤められ、この御文を入れ替えた上で制定されたのがわが宗派の「大師影供作法」でありまして、最後に「六種回向」

がございます。わが宗派のお荘厳、作法、声明等は天台宗からの流れを引くものが多く、登礼盤作法もそうです。登礼盤作法中、塗香を2回手に取るのは天台宗の作法に依ったもので、焼香は2回という型と併せて、登礼盤作法の一つの型として伝えられたものです。

質問⑨梵唄が現在の声明に改定された理由は？

梵唄が現在の声明に改定された理由とはというご質問ですが、本願寺派は第三代覚如宗主の頃より天台声明が取り入れられ、お経様に節、博士をつけて唱え、仏事が勤められて参りました。特に第十四代寂如宗主の時代、本格的に天台の梵唄が取り入れられたのですが、第十七代法如宗主の頃から次第に聖道門的な経文を用いる梵唄を廃して真宗正依の経文に天台の旋律をつけて唱えるようになりました。しかし同時に、誰もが唱えることのできる節に改める必要がありました。それほど専門的な旋律だったのです。たとえば言えば現在の修正会作法、これは天台の三十二相という作法をそのまま残しているわけですが、唱える側に極めて高度な技術が求められます。そういった背景から、お寺さんが特別に天台に習いに行かずとも唱えることができるよう改定が進められました。親鸞聖人から第八代蓮如宗主にかけての時代、朝暮の勤行は往生礼讃、年回法要は主に法事讃が用いられていましたが、蓮如宗主の時代に宗門改革とともに勤行の改定が進められ、礼讃を廃して正信偈、三帖和讃を用いることとされました。今回の質問にはごさいませんが、「三帖和讃は何故一度に六首拝読するのか」という問いをよく受けます。これは往生礼讃の六時に端を発し、またインドに遡りましても六という数字が極めて大切にされたという背景もございました。合殺念仏も念仏六返を二度繰り返します。蓮如宗主は正信偈と三帖和讃をセットで拝読するようにしていただきましたが、ところで私は各地で講義をさせ

ていただく中で必ずお尋ねすることがあります。皆さんのなかで、毎朝正信偈と三帖和讃を繰り返し読みなさっていらっしゃる方はおいでですか？三帖和讃は全部で326首あります。そんなに多くはないと思います。失礼ながら、ずっと続けておられる方はおいでですか？（しばらく会場を見渡して数名挙手される方があり）おお、これは素晴らしいですね。話が脱線しました。正信偈を読誦するにあたり、蓮如宗主はお弟子の慶聞坊を大原へ差し向け、作曲を学ばせました。



そして出来上がったのが当時の正信偈そして三帖和讃だったのです。その後、正信偈は法要にあわせて譜を増やし、最大で十種ございました。第十四代寂如宗主のときにそれを真譜、墨譜、中拍子、舌々行、草譜の五種に改正し、昭和の初めまで続けました。中拍子というのは現行の葬場勤行のなかの念仏、和讃、回向に節が用いられています。この五種正信偈のなかでとくに真譜は偈文の「帰命無量寿如来」から難しい節がつけられていますので、正信偈全体で2時間もかかるという長時間の勤行です。舌々行とは当時の葬場勤行に用いられていたもので、「ク」音を省略して称えます。「五濁悪世」というところは「ゴジョーアーセ」という具合に。現行の正信偈の節のなかで「中夏日域之高僧」の部分だけ唱え方が違うのはなぜかというご質問がありましたが、これはこの中拍子の唱誦法を採り入れたものです。これ以外に「為衆告命南天竺」の部分に「引く」がございまして、「善導独明

仏正意」以下の「開入本願大智海」の部分で「開入」と「本願大智海」の唱読では音を下げているのですが、そういった数カ所に中拍子の節が残されています。なぜそうなったのかということについては、作曲上のテクニックとしかわたしには言いようがないわけです。ところで現在の三帖和讃の節については、往生礼讃のなかの日中礼讃をもとにして作譜されているということも記憶の片隅に置いておいていただけますでしょうか。

もし前住職がお亡くなりになった時、間違ってもお経本を捨てることなどしないでください。昔のお経本はとくに貴重です。御文章については最後頁に、奥書と発行された当時の御門主様のお名前が書いてございますが、最古のものは第十一代顕如宗主のときに初めて印刷されて発行された御文章です。しかし、本願寺にすらその初版本が残存していません。ご門徒のお宅へお参りに行かれたとき、もし第十二代准如宗主、第十三代良如宗主の頃の御文章を見つけられるようなことがあったら、是非ともそのご門徒さんに上手に言って譲り受けるようになさってください（笑）。当時の御文章は五帖が五冊で発行されていたから、五冊がそろって発見されるというようなことは今はまずありません。それぐらい貴重だということです。最初のご質問から随分脱線してしまいましたが、梵唄が廃さ



れて声明に改正された理由は、誰か専門の先生について口伝で習得する必要があった難しい梵

唄を改め、広く多くの僧侶が唱えられるようにというねらいからだったということで、節そのものを平易なものにしてわかりやすくしたという背景があったということになります。なぜと問われても、それは時代に即応する必要があったからという以外にないでしょう。

①キンを初め2回、終わり3回打つ意味は？

キンを始め2打、終わり3打打つ理由はどうぞ質問ですが、昔のことですけれど御門主様は打キン7打、由緒寺院5打、一般寺院3打とされておりました。阿弥陀堂はキン、御影堂は沙羅と決められ、赤の金欄であれば御門主用、緑の金欄であれば由緒寺院用というように、事細かく定められていたのです。当時7打打つときに5打目までは大きく打ち、6打目を小さく、そして最後の7打目を大きくという具合に、数が多いと分からなくなりがちですから、もうすぐ7打目ですよというのが分かるように御門主様は打ってくださっていました。昭和12年、法式紀要制定の折に大キンをを用いる場合は正式には打ち下げて2打、キンをを用いる場合は打ち下げなしで強弱強の3打と打ち方を決めました。大キンの場合の2打については3打も必要ないじゃないか、2打で良いという意見で、わりと単純に定められたそうです（笑）。一方、葬場勤行のなかの作相については八代蓮如宗主の頃よりの打法が伝えられています。話は脱線しますが、東西本願寺が分派したことで大谷派のお荘厳や声明は本願寺派と異なる歴史をたどりました。そのひとつに大谷派の内陣では金箔をいりませんし、内陣に丸柱を使っておられません。御厨子、御宮殿ともにお戸帳がなく、喚鐘がありません。勤式の後期課程に学ばれた方はご存じと思いますが、報恩講で御門主は報恩講私記を黙読するよう定められておりましたり、東西分派にあたって仏具やお荘厳などでそれは細かく定められた過去があります。御仏飯は本願寺

派が蓮のつぼみ、大谷派は蓮の実を模して形作られておりますし、異なる点は誠に多いわけです。

⑫輪袈裟、式章の由来といわれは？

輪袈裟と式章の由来についてというご質問ですが、まず長い歴史をひもとくと、わたしたちが称する輪袈裟と畳袈裟とは本来は別のもので、一般の平僧は明治時代まで畳袈裟を被着することが許されませんでした。畳袈裟とは折五条ともいい、小五条袈裟を六つ折に畳んで仕立てたもので、一方輪袈裟とは天台宗より伝わり二つ折にして輪に仕立てたものです。御門主様がお使いになっていらっしゃるのは畳袈裟で、見るからに分厚く仕立てられていますが、広げると小五条袈裟となるものです。加えて申し上げるなら、その畳袈裟に下がり藤紋は入っておりません。また、その下がり藤紋が五条袈裟や輪袈裟に用いられるようになったのは明治以降です。

昔はさまざまな決まり事がありました。明治時代まで本願寺派の平僧は色衣の被着が許されませんでした。またお袈裟はお釈迦様の身にまとわれた糞掃衣ふんそういに由来し、阿弥陀堂の右余間に奉懸されている聖徳太子の御絵像は二十五条袈裟をまとわれたお姿です。高貴な人は三つの袈裟をお持ちになるとされ、御門主様も三衣箱さんねいばこを御付きの方が持って歩かれます。大谷本廟での龍谷会で御門主様の侍僧が持っているものが、そうです。三衣箱のなかには五条袈裟、七条袈裟、そして九条袈裟から二十五条袈裟のなかからひとつが入っているわけです。現在の七条袈裟は第十二代准如宗主の頃より用いられるようになったもので、五条袈裟をはじめ奇数で折られるものと定まっております、縦に短い布片一枚と長い布片一枚を縫い合わせそれが五列で作られているものを五条袈裟、縦に短い布片一枚と長い布片二枚を縫い合わせてそれが七列で作られたているものを七条袈裟と申します。現在の七

条袈裟はその昔、衲衣のうぎと言って一般の平僧は用いることができませんでした。修多羅についても以前、一般には三色または五色の物は用いることができなかったのですが現在廃止されています。ただし、本山の法要で用いられている赤



と白、紫と白、白一色などの修多羅は、現在一般に用いることができません。長い歴史で変わったものの、豪華な虫打ちという製法も御門主様依用のものだけに限られていましたが、昭和の改正によって変わったという歴史がございます。年回法要などご門徒にご法話なさるとき、お袈裟の由来を是非お話してください。またお袈裟を身につけられるとき、必ず頂いてからおつけなさいと、まずそこからですと大江和上から言われたことが、私の耳に残っています。皆さんはいかがでしょう。お袈裟をいただいてから身に着ける。これは、お袈裟のおかげでわたしは僧侶として上座に座らせていただいているということ、今一度頭にいただくということです。形だけでも良いですから、そういった心が大事なのではないかこの歳になってわたしは感じます。余談になりますが、得度でいただく墨輪袈裟は戦後になっていただくようになったもので、黄袈裟については安居に依用するものですが第十七代法如宗主の頃よりいただくようになったものです。また、布袍のうえに小五条袈裟をかけてお勤めなさる方が時折いらっしゃいますが、そのような服装規定はございませんので、やめてください。

ところで、枕経といわれる臨終勤行に際し、どのような衣体でお参りに行っていますか。(自分を指して) この衣体ですか。読経するときは「衣」で勤めるのが基本です。布袍は衣ではありません。第二十二代鏡如宗主の明治時代に、龍谷大学の先生のために作られたものが現在の布袍の初めで、勤行するときは本来、衣です。わたしは昔から黒衣に墨袈裟で臨終勤行を勤めてきました。臨終勤行とはその方の臨終に際し、その方に代わってお勤めするという意味のものです。まず形を整えるということが大切ではないでしょうか。さて式章についてですが、江戸時代に至るまで男子の正装は肩衣つまり袴と切袴でしたから、お寺にお参りする際や朝夕のお仏壇でのお勤めには、切袴を略して肩衣だけを身に着けてお参りしていました。現在でも滋賀県のお寺の報恩講でこれからお速夜が勤まろうというとき、門徒総代全員が袴と切袴を身に着けて外陣に立ち、巻障子を開けるというお寺がございます。誠に感動的な風習です。明治時代以降、洋服の普及とともに和服が用いられる機会



が減り、第二十三代勝如宗主の昭和8年、伝灯奉告法要に際して紐をつけた袈裟を「式章」と称して正装とすることになりました。余談になりますが式章は縫い目と申しますか、開くところが外側に来よう首にかけます。僧侶の略袈裟は縫い目が内側にくるようにかけます。知識として持っておいてください。

また、下がり藤紋は親鸞聖人がお生まれにな

った日野家が藤原家に由来するということと、さらに五摂家のひとつ九条家の家紋が下がり藤だということに由来しています。長らく宗派としての紋は持たずにいたところ、第二十二代鏡如宗主の伝灯奉告法要より本願寺の紋として下がり藤紋を用いるようになったのが始まりです。紋をご覧いただくとわかりますが、花葩はなぼらのなかに透かしが入っています。一方九条家の紋には透かしがありません。また蔓が二回交差しています。鏡如宗主の御裏方様が九条家から興入れなされた時、下がり藤紋をお持ちになりましたが、九条家の紋をそのまま用いることができません。現在の下がり藤紋が用いられるようになったのはいつからか。本願寺が現在の地に移った時、また東西本願寺が分派した時、第十二代准如宗主の時など諸説ありますが、第二十二代鏡如宗主伝灯奉告法要に際し、通称西六条下がり藤といわれる外側十一枚、内側七枚の花葩はなぼらから成る、現在用いられている紋を宗派の紋と定め、記念五条袈裟に用いられました。特別法務員の方がこの中においでになると思いますが、特法五条袈裟の鉄線紋は第十四代寂如宗主が御堂衆の袈裟として定められた紋です。さて、ここまでが皆さんからお寄せいただいた質問へのお答えの時間で、ここからはわたしが持ち込みました資料について少しばかりお話をいたします。

資料をご覧いただきますと一ページ目に、第二十代広如宗主がとくに僧侶に対して薦めたご教示があります。「木面の尊像、これを拝する事、真の如くにせよ」。宗教心のない方には単なる御絵像、御木像に過ぎないかもしれませんが、僧侶にとってはそうではないということですね。「一念の往生、これを信ずること、実の如くにせよ」。限られた人生の時間のなかで生かされておりますが、いずれは弥陀の浄土へ往生するということ、あなた自身がまず信じなさいという

ことです。「報謝の称名、寤寐に忘るる事なかれ」。人様にお念仏をよろこびましょうと呼びかける身ですから、少なくとも一日が始まる時と一日を終えるとき、新しい一日をありがとうございますとか、特別にうれしいこともなかったけれど一日を無事に過ごさせていただいてありがとうございますとか、お念仏とともに申し上げようわたしは努めています。現代の社会から急速に失われていること、それは「おかげさま」「もったいない」「ありがとうございます」「頂戴いたします」「お恥ずかしいこと」の五つの言葉です。これらは仏教の五徳と言われます。これらの言葉が聞こえてこない時代に、そして自分も言わない時代になってしまいました。そういった背景が仏壇離れ、寺離れをさらに加速させているのです。「謝徳の勤行、晨昏に廃する事なかれ」。是非、鐘の音とお経の聞こえるお寺にしようではありませんか。「三時の飲食、家族共に用うる」。現今では親子別に食事を採るお寺も多く、息子に教えておかねばならないことや伝えておかねばならないことが教えられない、伝わらない時代になってしまいました。わたしは人材養成委員会の委員として関わったことがございますが、得度式のアンケートを見ておりましても何故僧侶になりたいと思ったのかという問いに対し、「親が得度しろとうるさかったから」とか「欲しい自動車を買ってもらえるから」などという答えが中にあり、がく然といたしました。ところで、得度式のご記憶を皆さんはお持ちですか？わたしが得度したのは昭和20年、バタバタの時代の中でしたが、今でもハッキリと覚えておりますが、若い方に得度式の印象を尋ねると「足が痛かった」とか「暑かった」といった記憶しかないという方が多く、印象が薄いということは誠に残念です。僧侶になりたいくてなりたくてという感動がないのでしょうか。「一時の仏飯、あに疎頼ならんや」。三分の一のお寺で、御仏飯が上がらない時代だと聞きます。

手前は三食食べてお替りまでしているのに、わずかな御仏飯が上がらないお寺があるのです。「吾が座を常に払う、如何に況んや、仏室をや」。居間や廊下の掃除も結構ですが、お内陣のお掃除をもっと心がけましょう。皆さんのお寺では新発意にお内陣の掃除をきちんとさせていらっしゃるでしょうか。若い人のなかで箒を持たない、雑巾を絞ることができないという方が増えているそうです。色んな意味において子どもに伝えるべきこと、伝えたいことが伝わらない時代になっております。「吾が衣を裁つ、如何に況んや、



仏帳をや」。自分の着物を買うお金があっても、仏さまの身の回りや仏具を求めるお金がないのかなと思えるお寺があるようです。「香は須らく清浄なるべし、燭は須らく明朗なるべし」。お香は今月一束100円のものをお使いならば、来月は200円のものにするなどして、少しでも良い香りのするお香をお使いになるよう心掛けてください。多くの仏壇がスイッチポンと手軽にお灯明が点きますが、せめて蝋燭だけでも本物をお使いくださいとわたしは言っています。しかしそこまでこだわるお寺さんが、そこまで厳しく言うお寺さんが、いまほとんどいらっしゃいません。「花をして枯らしむる事なく、器をして穢しむるなかれ」。ご尊前に造花を生けておいでのお寺が多い。井筒法衣店などでも造花が見られますが、お使いになっていらっしゃるお寺が多い。仏華には毒のあるもの、棘のあるもの、蔓のもの、いのちのないものはお供えいたしませ

るので、薔薇をお供えになっているご門徒さんのお宅に行くことがあれば、「故人が薔薇をお好きだったかもしれませんが、これこれこういう理由があるので、仏華とせずにお仏壇の前に花瓶を置いて、お仏壇の外で味わっていただけませんか」とやんわりとお伝えいただけますでしょうか。「更に師恩を重んじ、且つ世教に従え」。得度式でのご記憶をひもといてみてください。式のなかで一拝の作法、三拝の作法があります。これを土下座させられたと誤解をしていた方がいました。アンケートにそうお書きだったので、「御門主というのはどれほど偉いのか」と怒っていらっしゃるご様子でした。こんな人が僧侶になるのかと思うと暗澹たる思いを持ちました。御門主様が戒師となって、三宝に帰依したから、中身は整わなくとも僧侶となるのであって、御門主様なくしていまのわたしはないのです。善知識とは何でしょう。同じ人間じゃないかという意見をもしお持ちであれば、それは大変な間違いといわざるをえません。「家職を妨ぐる事なく、深くこれを思慮せよ」。



お寺さんであるということは、良くも悪くも注目される立場であるということです。坊主も人間だという言葉は絶対に許されません。衣を脱いでご門徒さんと飲食を共にするときでも、酔っぱらっていても、決してしてはならないことがあります。職を大事にしようという思いを持ってもらいたい。資料を一枚めくってください。「住職として求められる責務」として「寺務

を主宰する」とあります。寺院備付義務書類を整えることや寺院規則や財産記録を整えること、予算や決算などを新発意や総代さんの見えるところで整えることなどを進めてください。その他に道場荘厳、作法荘厳、勤行荘厳、知識荘厳、信仰荘厳ということをもう一度考えていかねばなりません。資料を一枚めくってください。宗祖親鸞聖人のご生涯を簡単に説明できる方が少ないようです。宗祖のご誕生についてや法然聖人との出会いなど、詳しくなくとも構いませんから人に話せるよう勉強してください。次の頁にまいります。浄土真宗本願寺派の正しい仏壇の荘厳と仏具について、名前とお飾りを知っておいてください。細かいことですが両脇掛に九字と十字の名号が奉懸されているとき、御仏飯はお供えしません。御開山と蓮如宗主が奉懸されているときだけ、御仏飯をお供えください。小さいお仏壇も増えているようですから、四具足が必ずしも置けないときもあるでしょうが、基本の形だけは覚えておいてください。次の頁に進みます。本願寺の七不思議などはご法話にも使えるかと思えます。キリンビールの麒麟の意匠は、国宝の唐門より採られたと言われています。そんなこともご門徒さんを前にお話しになられてはいかがでしょうか。さて次の頁をお開きください。連続研修会の中央教修に講師として参りましたとき、参加されている方からこの頁にあるようなご質問をいただいたことがあります。この講習を終えた後、それぞれが指導していく立場となっていただくという方が、このような疑問質問をまだお持ちというのはいけません。そのなかから50の問いを箇条書きしてきたのですが、教義的なご法話をなさるのも良いですが、こういった身近な問いを材料にしてお話しをされるということも大切な気がいたします。さて最後になりましたが、こういった研修会の機会は大変少ないと感じます。仏事から儀礼を取ったら後は何も残らないのではないかと、

わたし自身は思っております。お内陣のお荘厳をはじめ、お勤めはもちろん、作法はもちろん、それらをひっくるめて儀礼が仏事を伝える大きなご縁になっているものと思います。お経の文句が分かる、分からないということではなくて、お内陣のその場所でお勤めさせていただくことを、もっと。本日はお招きをいただき、誠にありがとうございました。

以 上